

中陵漫録 卷之二

随筆。佐藤成裕著。江戸末期。

○徳七天狗談

信州に徳七なる者あり馬を引き戸隠山の邊に行き草を刈る其時山伏二人来る一人は十七八才にして絹布を著し短刀を佩て甚た美しき容にて徳七を呼て云く山中道を失ふ街道に出るは何の道にてよきや徳七對て云く其路より此道を過きて行くへしとて教て行しむ即青茅の上にて滑り倒る其足を見るに人の足に異て墨にて塗りたるか如く真黒なり徳七是を見て始て人にあらさる事を知て大に驚き茅を馬に附て歸らんと(す)るに乃半里許の處人の登り至る事ならぬ岸上に二人共に立て徳七を見る様子あり徳七是を見て益々驚恐て茅を打捨て馬に鞭て走り歸る是より病む事数日にして漸く平癒に至ると親しく予に此話を為す是乃天狗なるへし

註 国立公文書館デジタルアーカイブで「中陵漫録」を

検索。「中陵漫録2」をpdfで画像一括ダウンロード

ド。40、41コマ目。『日本随筆大成』〈第三期〉 3

にもあるが、少々語句に違いあり。